

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 吉野内 美恵子

論 文 題 目

バルザック *La Peau de chagrin* (『あら皮』)  
— 「幻想に隠された広大な構想」 —

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	松澤和宏
委員	名古屋大学	教授	中村靖子
委員	名古屋大学	准教授	重見晋也
委員	愛知大学	名誉教授	高橋秀雄
委員	信州大学	准教授	鎌田隆行

## 論文審査の結果の要旨

### [本論文の概要]

本論文はバルザックの代表作の一つである *La Peau de chagrin* (『あら皮』) の従来の通説を批判的に検討し、この作品の二重構造を明らかにしたものである。

第一部第一章では、これまでの膨大な研究史を検討している。この作品がゲーテの『ファウスト』などに読まれる悪魔との契約説との関連で「悪魔に魂を売った欲望の小説」として解釈されてきたこと、またこの小説における写実主義的な小説の側面と幻想小説的な側面との関係、あるいは「風俗研究」と「哲学研究」との関係をめぐって研究者の間で長年重ねられてきた議論が詳述されている。第二章以下では、バルザックが読んでいたことが明らかなダンテの『神曲』、ゲーテの『ファウスト』、ラブレールの『ガルガンチュワとパンタグリユエル』の概要が、『あら皮』への影響関係を念頭において紹介されている。

第二部では、この作品の初版にあったが、第二版以降削除されたバルザック自身による序文ならびに 1833 年版に付されたフィラレート・シャールの序文が詳細な校注を付して訳出されている。特にシャールが序文で、「幻想に隠された広大な構想」が読者によって読み落とされてきたとの指摘を論者は重視している。

以上のことを踏まえて、第三部ではダンテの『神曲』との間テクスト的な関連性に着目しつつ、『あら皮』が欲望の物語の背後に浄罪の物語を隠しもっているという作品解釈が展開されている。まずこの作品と同時期に執筆・刊行された『追放された者たち』にはダンテが作中人物として登場するばかりではなく、随所に『神曲』の思想が散りばめられており、バルザックが『神曲』を読み込んでダンテの思想を理解していたと論者は判断している。『あら皮』では、「悪魔との契約」を描いた地獄の物語に、傲慢や羨望をはじめとするキリスト教の七罪を悔い改めることで浄化していく主人公ラファエルの煉獄の物語が影のように寄り添って進行していることが、様々な細部によって示唆されていると論者は解釈している。さらに『あら皮』のエピローグ全体が『神曲』の煉獄篇と天国篇の描写に倣って描かれており、ラファエルとポーリーヌが天国に向かうことが、色彩をはじめ諸々の象徴の分析によって明らかであるとする。こうした二重構造の手法はラブレールの用いた反転図形の技法を模倣した側面があると論者は見ている。また作品末尾に付されていた「モラリテ」には、思慮分別を持って行動する知と自由意志を重視するラブレールの「テレームの僧院」への称賛が読まれるが、論者はそこに七罪を浄化したダンテが「エデンの園」に入る『神曲』との相違を見ている。

以上のことにより、論者は初版の段階からバルザック自身によって「哲学研究」に分類された『あら皮』において、バルザックが本当に伝えたかったのは、欲望の実現とともに縮小する「あら皮」の物語ではなく、浄罪の物語の方であり、また作品の題名である *La Peau de chagrin* は「あら皮」ばかりではなく、「悲しみの人生」をも意

## 論文審査の結果の要旨

味しているという解釈を提示している。

### [本論文の評価]

バルザックの代表作の一つである『あら皮』は、所有者の欲望が叶うたびに縮むあら皮が、所有者の残された生命を象徴するという風変わりな幻想小説的要素を取り入れているとはいえ、パリを舞台に野心的欲望を生きる青年の人生を描いた写実主義的な小説として見なされてきた。ところがバルザック自身はこの小説を初版の時点から風俗小説ではなく、哲学小説に分類していた。論者は、数多くの先行研究を渉猟し、フィラレート・シャルの序文にある「幻想に隠された広大な構想」という指摘に着想を得て、この作品は写実主義小説の埒を超えた構想のもとに執筆されたのではないかとの仮説を立てた。そして主にダンテ『神曲』との間テクスト性の分析を通して、欲望の物語の背後に浄罪を経て天国に向かう煉獄の物語が隠されていることを細部にわたる緻密な実証と説得力のある解釈によって明らかにすることに成功したと言える。とりわけ七罪の浄化を小説の後半部に読み取り、これまで不可解とされてきたエピローグに浄罪を経て天国に向かう物語が寓話的に語られていることを様々な象徴の解読を通して読み取った点は特筆に値する業績である。この作品の二重構造をはじめて明らかにしたことによって、19世紀以降の『あら皮』論を一新しており、今後フランス語での論文刊行が望まれる。

また『あら皮』や『追放された者たち』の読解に基づきながら、バルザックがダンテの思想に共鳴し、『神曲』の文学的表現を19世紀前半のパリを舞台にした小説の執筆において活用していることを緻密に実証し得たことは、バルザックはダンテの『神曲』を理解していなかったとするこれまでの定説を根底から覆すことになる。本論文は、バルザックの他の作品にもダンテとの内的関連を探る新たな研究の展望をひらいており、バルザック研究への貴重な貢献として高く評価できる。

ただし、本論文にまったく問題がないわけではない。天国に向かう煉獄の物語を作品名の *La Peau de chagrin* に即して「悲しみの人生」と呼ぶことに関しては説明不足の感が否めない。また「モラリテ」に関して言及されているラブレエ的「自由」に関しては、その内実がやや不明瞭であり、キリスト教的な自由概念やバルザック自身の思想との関連でより深く掘り下げられるべきであろう。

しかしこれらの問題は、今後の取り組みによって克服可能なものであり、本研究に関する重大な瑕疵とはいえないものである。

バルザック研究史に新たなページを開いた本論文は、精読と博搜の努力の賜物であり、国際的にも高く評価されるに値する。

以上のことから審査委員一同、本論文を博士（文学）の学位に相応しい水準の研究であると判断した。

## 論文審査の結果の要旨

## 論文審査の結果の要旨

## 論文審査の結果の要旨